

佛

教

大

系

俱舍論第一

佛敎大系刊行會編纂

佛敎大系

俱舍論第一

佛敎大系刊行會藏版

製系有
複大所
許教權
不仏版

仏教大系⑨（全六十四卷・別卷）

俱 舍 論 第一卷

大正九年一月二十五日初版発行
昭和五十三年二月十日復刊発行◎

編纂者

仏教大系刊行会

著作権所有
者

中山 晴 夫

印刷者

山中印刷所

発行所

仏教書林 中山書房

東京都文京区湯島二ノ十四ノ四
電話 〇三―八三三―一七六六
振替 東京三一―八〇三二八

凡 例

一 本書は阿毘達磨俱舍論三十卷 玄奘譯 を本文とし。此に俱舍論記三十卷 普光述 及び俱舍論疏三十卷 法寶撰 の末註を會合せり。蓋し俱舍論の末註としては。右二本の右に出づるものなかるべし。

一 本書には。俱舍論記を「光記」俱舍論疏を「寶疏」といへる略名を用ひたり。

一 本書は俱舍論の本文を三號活字とし。光寶二記の末註を五號活字とす。

一 俱舍論の丁數は一般流布の刊本に依る。但し寛延本。校刻本。冠導本。何れも同型なり。光寶二記の丁數は單行流布の刊本に依る。但し校正本も同型なり。

一 本書の校訂に就いて。本文は藤井氏の校註本を底本とし。又末註は旭雅の校正本を底本として。此に奈良石山の古寫本數種を参照したり。されど尙未だ完からざる點あり。深く慚謝する所なり。

京都六條一念精舍寓

大正八年九月一日

舟橋 水哉

阿毘達磨俱舍論解題

一 俱舍論の著作と翻譯及び其内容

阿毘達磨俱舍論、略して俱舍論ともいふ、世親菩薩の名著なり。梵語に婆藪槃豆、此に世親と譯す、舊に天親といふ。西曆四五世紀の頃、即ち佛滅九百年印度に出現して、幾多の著書をなし、最も布教に力められき。健駄維國布路沙富羅城、即ち現今の Peshawar に生る。無着は其兄なり。初め說一切有部に出家し、後經量部を學び、理長を宗として自由討論を試む。されど根本的に有部を研究する必要ありとして、名を匿くして隣國迦濕彌羅に入り、悟入を師として學ぶ事四年、遂に悟入に依て發見され、乃ち故郷に歸る。有部の根本聖典たる大毘婆沙論を、組織的に且つ批評的に講じて俱舍論頌を著作す。世親此を迦國に贈る。後此に註釋を施し、破我品を加へて、かくて俱舍論の大著を完成せり。世親又此を迦國に贈る。悟入の弟子衆賢大に此を慨し、順正理論を造りて俱舍論を反駁せり。されど世親の威名は依然として赫々たりき。

俱舍論の翻譯に三あり。其一は西藏に於てなされ、他の二は支那に譯されたり。初め眞諦三藏譯して十二卷とし、後に玄奘三藏譯して三十卷とす。現今單行流布するものは玄奘の譯なり。最近國譯及び露譯の企劃あり。

俱舍論は之を界、根、世間、業、隨眠、賢聖、智、定、破我の九品に分つ。界根二品に於て七十五法論と因果論とを記し、世業隨の三品に於て輪廻論を、賢智定の三品に於て解脫論を述す。七十五法論と

因果論とは本書の總論にして、輪廻論と解脫論とは其各論なり。又前者は哲學的方面にして、後者は宗教的方面なり。而して破我品は實に此が結論と見るべき者なり。阿毘達磨を譯して對法といふ。對法とは四諦の法を對觀して涅槃の法に對向する義なり。俱舍を譯して藏といふ。藏に二義あり。一に包含、二に所依。發智、六足、婆沙等の内容たる對法を、此論に包含する意義にて對法之藏、依主釋と見るも可なり。又其對法を説ける發智等を此論の所依とする邊より見れば、對法即ち藏にて。全部發智等の名稱となるも、其を其儘此論の名稱となして有財釋に見るも可なり。何れより見るも本書の旨趣は勿論宗教的方面にあれど。論述上有趣味の點は寧ろ哲學的方面に在りと謂はざる可からず。

前にも記したるが如く。元來本書は批評的に書かれたるものなれば。吾人は殊に哲學的方面に於て、世親の意見が那邊に在るやを知悉するに苦しまずんばあらず。有部の教理が極端なる多元論にして、七十五法以上の實在を信じたりし事は婆沙論に依りて明なり。されど世親は其何れまでを肯定し、又何れを否定したりしかは、俱舍論の上に於て明瞭とはいふ可からざる也。第一に無爲法の實在に對しては卷六に明に此を否定せり。第二に不相應行の實在に對しても卷四五兩卷に明に之を否定せり。但し命根の實在のみ此を肯定したるが如く見ゆるも。諸種の研究よりやはり此を否定したるものと見るを妥當とすべき也。第三に色法の中、無表色の實在に對しでは卷十三に此を否定せり。第四に心所の實在に對しては卷二十八に此を否定せるも。而も其全部を否定したるかを速斷す可からざる也。されど順正理論の批評より見て、心所の幾分の實在を世親が肯定したる様にも思はれず。恐らく其全部を否定して、唯六識心王のみ其實在を肯定したるものならん。第五に色法の中、五根五境の實在に對しては。世親は果して如

何に考察したりしか。吾人の研究上最も明瞭を缺く點なりとす。卷二に能造の四大種を論ずるを、順正理論の批評より見て。世親或は所造の全部を否定するには非ざるかと思はしむる點なきにあらず。心所論と比較して吾人はかくの如く論ずるを妥當とすと信ず。されば世親は七十五法の中、單に心王と四大種と、色心の實在を肯定したるもの也。加ふるに有部の三世實有法體恒有論に對して過未無體現在有體論を主張し。教理の齊整を謀るに一方に種子論を以てせり。かくて俱舍の思想は、有部舊派と唯識との中間に位するに至れり。

二 俱舍論の本文

第一、版本 俱舍論は大藏經中に編入されたれば。西藏本、宋本、麗本を初めとして幾多開版されたることを此處に記載するの要を見ず。降て我邦に入ては、其が單行本として開版されたる古きものを見ず。僅に天和三年版の一あるのみ歟。而して寛延四年版は恐らく別版に非ず。近代に至て智山の龍謙、慶應元年校刻本を開版せり。明治に入て佐伯旭雅の冠導本、藤井玄珠の校註本開版せらる。單行本の現存せるものは以上四本なり。

第二、寫本 吾人は唐寫が現存せるや否やを知らずと雖も。我邦奈良朝時代のものには往々寺院及び個人に於て所藏せらる。其最も有名なるものは石山寺に十數卷あり。其一本は奈良博物館に寄託出陳せらる。又石山藏經中にも全部鎌倉時代のもを以つて編入せられたり。東大寺圖書館にも、全部平安末より鎌倉へかけてのものを珍藏せり。此等は寫本としての上乗なり。

三 俱舍論の註釋

一、俱舍釋論 耶輸彌多羅述。本書が梵本として現存せる事は實に學界の慶事なり。今我邦にも數本あり。南條博士の所藏は笠原氏と共に嘗て英國にて寫録せるもの也。

二、俱舍摘要 同人述。西藏大藏經として現存せり。

三、俱舍摘要精釋 同上。

四、俱舍註釋心隨燈 陳那述。西藏本。

五、俱舍論頌精釋 戒賢述。西藏本。

六、俱舍釋廣疏 摩呬里制吒述。西藏本。

七、俱舍註釋名義隨順 富樓那波爾提吒述。西藏本。

八、俱舍註釋緊要本經較義 禪定天述。西藏本。以上西藏本は寺本教授の調査に依る。

九、疏三十一卷 神泰述。神泰は玄奘の高弟なり。現存するもの五卷と稱せられたるも、今は七卷續藏中に編入せられたり。

一〇、記三十一卷 普光述。普光も玄奘の高弟なり。記述頗る穩健にして又親切なり。後世此に據るもの多し。元祿十五年開版。其後明治二十年旭雅の校正本出づ。

一一、疏三十一卷 法寶述。法寶も玄奘の弟子なり。光記に比して論鋒鋭く、見るべき點亦頗る多し。遂に後世光寶二學派を生ずるに至れり。寶永元年開版、其後明治二十年旭雅の校正本出づ。從來卷十二を缺くも。大正六年石山寺にて發見せられ翌七年開版せり。

一二、頌疏二十九卷 圓暉述。單に頌に註釋を加へたるものなるも。行文平易にして能く後人の爲に

讀する慶長版を初めとして數回開版せらる。以上四本は支那の部なり。

一三、明眼鈔六卷 珍海述。天保十年開版。我邦に於ける註釋の最古にして、論題を集めたるもの也。

一四、三季抄十二卷 聖禪述。

一五、大義抄十卷 藏圓述。

一六、明思鈔三十七卷 宗性述。以上三本は東大寺圖書館に藏せらる。明思鈔は一名本義鈔ともいひ、

最近佛教全書中に編入せらる。

一七、名目一卷 著者不明。慶安五年開版。

一八、圖紀四卷 秀翁述。秀翁は野山の人。元祿八年開版。

一九、義釋一卷 妙瑞述。同じく野山の人。享保十四年開版。

二〇、義演三十六卷 周海述。周海は豊山の人、本書は佛教大學に藏せらる。

二一、聞書五卷 法住述。同じく豊山の人。

二二、金毛俱舍論五冊 同人述。豊山大學に藏せらる。

二三、法義三十卷 快道述。快道は實に豊山學者としての中樞をなしたる人なり。

二四、略法義五卷 同人述。以上二本は最近佛教全書中に編入せらる。

二五、玄談一卷 同人述。

二六、得魚編三卷 海應述。海應は智山の人。

二七、玄談一卷 同人述。

二八、分科一卷 同人述。

二九、玄談一卷 信海述。同じく智山の人。

三〇、分科二卷 同人述。

三一、講要義林三十七卷 大元述。

三二、名所雜記六卷 旭雅述。旭雅は泉山の人。明治二十年開版。

三三、分科三卷 同人述。明治二十七年開版。

三四、指要鈔十冊 湛慧述。湛慧は淨土宗の人。

三五、要解十卷 普寂述。同じく淨土宗の人。最近佛教全書中に編入せらる。

三六、分科一葉 同人述。寶曆十二年開版。

三七、懸叙一卷 同人述。

三八、破我品科文一卷 月筌述。月筌は眞宗本派の人。寶永四年開版。

三九、記三十卷 寶雲述。同じく本派の人。明治二十五年初五卷開版。

四〇、錄三卷 同人述。

四一、玄談一卷 藤井玄珠述。同のじく本派の人。明治二十六年開版。

四二、稽古二卷 法幢述。法幢は眞宗大谷派の人。明和六年開版。

四三、述文記三卷 宣明述。同じく大谷派の人。

四四、記四十六卷 寶成述。同じく大谷派の人。

四五、乙卯記二十三卷 德霖述。同じく大谷派の人。

四六、講義十卷 法宜述。同じく大谷派の人。明治三十一年開版。

四七、講判十二卷 南條神興述。同じく大谷派の人。明治三十五年開版。

四八、百論題決擇記二卷 楠潜龍述。同じく大谷派の人。明治三十年開版。

四九、總明論至要編二冊 天海？述。天保十三年開版。

五〇、大科圖一葉 大嶺述。弘化四年開版。

五一、玄談一卷 勤息義城述。明治廿二年開版。

五二、玄談一卷 佐伯定胤述。

五三、達意一卷 村上專精述。明治廿四年開版。

五四、持鉢一卷 松浦僧梁述。明治卅七年開版。

五五、大綱一卷 梶川乾堂述。明治四十一年開版。

五六、俱舍宗大意一卷 齋藤唯信述。明治三十年開版。

五七、同大意一卷 古澤文龍述。明治二十八年開版。

五八、同大意一卷 隈部慈明述。大正四年開版。

五九、同綱要一卷 今岡達音述。明治四十三年開版。

六〇、俱舍哲學一卷 舟橋水哉述。明治三十九年開版。

以上は開版されたるもの及び寫本として傳はるものの一部を記載したるのみ。若し其れ講辯筆錄の如き

は少くとも數百部現存すと見て可なり。

目次

阿毘達磨俱舍論

自卷第一至卷第五終

俱舍論記

自卷第一至卷第五終

俱舍論疏

自卷第一至卷第五終

阿毘達磨俱舍論

尊者世親菩薩造

俱舍論記 三十卷

沙門釋普光述

俱舍論疏 三十卷

沙門釋法寶撰

【光記】卷一 俱舍論記卷第一

沙門釋普光述

分別界品第一之一

將釋論文三門分別。一明論緣起。二釋論題目。三隨文別解。蓋俱舍論者

筏蘇槃豆之所作也。筏蘇名世。槃豆名親。印度有世俗說世親。世人親近供養。故以名焉。菩薩父母從所乞為名也。舊譯為天。此誤矣。若言天恩號提婆也。菩薩學通內外。博達古今。名振五天。聲流四主。故能潛名數載。討廣說之教源。製論一時。播芳名於萬古。密申傳說。有部懷疑。請釋頌本文。方法宿滯。斯論乃文同。鈎鎖結引萬端。義等連環。始終無絕。採六足之綱要。備盡無遺。顯八蘊之妙門。如觀掌內。雖述一切有義時。以經部正之。論師據理為宗。非存朋執。遂使九十六道。同視斯文。十八異師俱欣祕典。自解開異見。部製群分。各謂連城。齊稱照乘。唯此一論卓乎迥秀。猶妙高之據宏海。等赫日之映衆星。故印度學徒號為聰明論也。往有三藏真諦法師。已於嶺表譯茲論訖。但為方言未融。時有舛錯。至如現法非得。先哲同疑。常非果因。前賢莫辨。如斯等類。難可備詳。略舉二三以彰今譯。和上三藏法師。

志存弘傳，誓遊西域，搜揚奧典，盡罄嶺之遺言，研覈法門，窮上賢之餘說。既而遍觀其聖跡，問道復周，旋輒上京奉詔翻譯。此論以永徽年中於大慈恩寺譯。文義周備，妙理無虧。傳彼梵言，務存其本，庶使懷疑之侶，煥若冰消；佇決之徒，實忘淹寢。此即第一明論緣起。

【寶疏】卷一 俱舍論疏卷第一

沙門釋法寶撰

將釋此論五門分別：第一初轉法輪時，二學行次第，三教起因緣，四部執先後，五依文解釋。一會初轉法輪時者，於中有四：一定成道日，二定轉法輪日，三述中間事別，四會說不同。一定成道日者，依長阿含經第四云：八日如來生，八日佛出家，八日成菩提，八日取滅度。次文云：二月如來生，二月佛出家，二月成菩提，二月取涅槃。又灌佛經云：佛告諸天人，十方諸佛皆用四月八日夜半時生，皆用四月八日夜半時出家，皆用四月八日夜半時成道，皆用四月八日夜半時而般涅槃。諸經八日皆同。說月有異，唯二四別，不言餘月。準上二說，說雖有異，成道月日即是同也。所以得知略有二理：一以立正異故，婆羅門國以建子立正，此方先時以建寅立正。建子四月即建寅二月，故存梵本者而言四月。依此方者即云二月，根本一也。二準智論及婆沙計：梵王請前五十七日四月調根，兼觀機緣，總有六月，即是二月八日成道，至八月八日轉法輪定。如下引文，以此故知二月八日成道爲定。去八月八日有六月故。若是四月八日，即無六月。去轉法輪四月無文證故。又釋律論云：佛與五比丘四月十六日結前安居，安居去四月八日唯有九日，即與法華智論毘婆沙等衆多經論，日月相違。準此故知二月八日成道爲定。問若爾，何故菩薩處胎經云二月八日成道，二月八日轉

法輪。二月八日降魔。二月八日般涅槃。答此有二釋。一處胎經說。菩薩處胎亦轉法輪。此爲密衆。非爲顯衆也。成道之日卽轉法輪。義亦準此。今言爲五比丘轉法輪。日諸說不同。非是密衆。二諸經中錯。二月爲四月者。由建正不同。已如前釋。錯八月爲二月四月者。以迦栗底迦是八月卯星之名。二月又是建卯地之月。星地詮別。卯名同也。若知迦栗底迦是酉地之卯。翻爲八月。若謂迦栗底迦是震地之卯。翻爲二月四月。由此轉法輪等。日有二四八不同。般涅槃日八四二月之異證多。教理度五比丘八月爲定。會涅槃日如別章釋。二定轉法輪日者。諸經論中皆云。波羅奈國鹿野苑。中爲五比丘轉四諦法輪。說中間事日數不同。然不指陳說法月日名者不可憑準。唯有婆沙及釋律論分明。指陳說法月日。應依此文。婆沙一百八十二云。佛於迦栗底迦月白半第八日度阿若憍陳那。迦栗底迦當此方八月也。婆沙一百三十六云。羯栗底迦月白半第八日晝夜停等。至第九日夜增。一獵縛。故羯迦雖異。語是同也。故知定是八月八日。又釋律論云。佛與五比丘四月十六日結前安居。一夏中不得聖果。過夏於八月八日憍陳那忽然見法。此二論文極理分明。故餘文既不分明。不可依準。故知八月八日轉法輪定。佛成道日雖有二說不同。或二月八日或四月八日。無經論說。二月四月轉法輪。故知非是三七日後。亦無文說。三月四月五月。故知非是六七八七五十七日後轉法輪也。三述中間事別者。經律論中述從成道至轉法輪中間時節。廣略不同。前後有異。今且觀機已前依四分律叙觀機已後依婆沙述。餘文同異次便錄附。四分律三十一云。初夜得宿命明。中夜得死生智證明。後夜獲得漏盡明。得此三明。卽往菩提樹下結跏趺坐。七日不動。受解脫樂。過七日已。從其定起。受二賈客兄弟。妙蜜爲授。二歸云。從此優婆塞最初也。四王奉鉢。用受妙蜜。第一七日也。因果經。